

東海道五十三次道中紹介（駿河・遠江路編）

工 39 市村正明

喜寿を挟んで歩いた東海道五十三次、いきさつと箱根路の道中紹介記事は前回ご紹介しました。今回は第二区分の駿河・遠江路を掻い摘んでご紹介します。

II 駿河・遠江路（三島大社～見附間）

今回は三島大社から見附間を九回十三日で歩き繋いだものです。



第14回 三島大社～沼津間

三島は三島明神の門前町として発展、箱根越えを控えた宿場、また、箱根峠越え・関所を無事通過した人は「山祝い」と称して三島女郎衆を呼んで宴会等で宿場は賑わった。富士山の溶岩流の先端部でもあり伏流水に恵まれ江戸時代からウナギが名物だった所である。



柿田川公園の湧水池

伏流水が豊富な柿田川公園、今は伏流水が枯れているが明治時代の小松宮別邸・楽寿園は必見である。



楽寿園小浜池

旧東海道沿いには今も有名ウナギ店があり盛況であった。

街道を挟んで北に一の本陣世古本陣跡南に二の本陣樋口本陣跡の石碑で知ることが出来る。



時の鐘

源兵衛川の側に三石神社、その境内に再興された時の鐘がある。

境川の手前には秋葉神社がある。そこが三島宿の西のはずれで西見附跡の石碑あり。

境川から先が駿河の国である。



平作地藏堂

三島を後にすると玉井寺・一里塚、次の沼津一里塚まで単調な道中だった。唯一沼津一里塚手前の狩野川沿いに小さな平作地藏堂がある。人形浄瑠璃の三大仇討ちの一つ「伊賀越道中双六」に出てくる「沼津の段」的一幕「平作住居の場」の舞台となった所である。

三島宿 富士の湧水 恵み有

第15回 沼津～原間



広重の五十三次の内の沼津図は狩野川沿いの沼津宿手前が描かれている。

中央公園内に沼津城本丸跡とあるがわずかに石垣の一部が城の痕跡を残すのみである。



沼津城本丸跡

沼津は戦災にあい大幅な区画整理を行ったので宿場の面影は

ない。わずかに本町通りに高田本陣跡、中村脇本陣跡、間宮本陣跡、清水本陣跡の石碑がある。



高田本陣跡

千本松原手前に千本山乗雲寺がある。海岸に砂防林を築いてくれた増誉上人に松が千本を超えた頃に農民が感謝して庵を建てたのが始まりという。



千本山乗雲寺

千本松原は幅180M約16km続く松原は見応えがある。

以降原宿までは単調な街道である。

原宿は臨済宗中興の祖と言われた白隠禅師が生まれ没したところである。

鵜林山松蔭寺は白隠禅師が住職をしていたお寺で白隠禅師のお墓をはじめ禅画、すり鉢松等縁のものの多数あり。

他に問屋場跡、本陣跡、錦戸跡等の表示がある。

原宿は 白隠禅師の ^{ゆかり}縁の地



鵜林山松蔭寺

第16回 原～吉原間

原から吉原間は狩野川と富士川に挟まれたところで昔は浮島ヶ原という広大な湿地帯であった。江戸時代この地帯の新田開発工事は海からの高潮対策を含め困難を極めたところである。



街道を歩くとまず昭和の放水路を渡る。土木技術が進歩した昭和時代に二本の放水路を作り問題を解決したという。

江戸時代に新田開発に貢献した植田三十郎氏（上田新田）、増田平四郎氏（沼田新田）、高橋勇吉氏（天文堀）の功績を称えた碑を順次、訪ねることで当時の困難さを実感する。



さらに再々の大津波の影響で宿場を移さざるを得なかった吉原に至る。街道の左側に妙法寺（毘沙門天）があるこの辺りが元吉原宿跡であった。



吉原宿は寛永十六年（1639）の大津波に会い内陸に移転し中吉原宿にしたのだが、延宝八年（1680）再び大津波で壊滅的被害を受け現在の吉原本町に移った経緯がある。この時に東海道が北に大きく迂回



する箇所が出来た。そこからは富士山が左に見える景勝地となった。広重も吉原の左富士を描いている。



吉原本町の商店街には脇本陣（野口祖右衛門）、下本陣（長谷川八郎兵衛）、上本陣（神尾六左衛門）、脇本陣（杉山平左衛門）のタイルが路面に埋められて僅かに歴史を残している。

間の宿本市場に鶴芝の碑があるが、この辺りの茶屋から冬の富士山の山腹の雪の形が一羽の鶴が舞っているように見えるところから鶴芝といわれたという。

干拓の 三賢人の 苦勞知り

第17回 吉原～蒲原間

吉原から東海道を少し西進すると富士川に至る。富士川の手前に暴れ富士川の治水事業を古郡家の親子三代で完成させたという雁金堤がある。この工事には千人目の巡礼僧が人柱になったという悲話がある。

更に富士川の開削には京都の豪商、角倉了以が尽力し渡船を可能にしている。西岸の岩渕町に角倉了以紀功碑がある。

間の宿岩淵村は富士川の氾濫で山の手に移転したが同時に東海道も山の手に新道として移され蒲原まで内陸を歩くことになる。



小休み本陣跡

岩淵には渡船を控えた大名などが小休止する小休み本陣跡（常盤家）がある。そこには当時植えられた庭木のイヌマキ（天然記念物）がある

岩淵から約2里位歩くと蒲原宿である。

蒲原宿には旧東海道沿いの家並が比較的残っている。天保年間（1830～）の建物の



旅籠和泉屋

旅籠和泉屋、西本陣跡等。



その他、広重の描いた東海道五十三次の錦絵の中で役物三点のうちの一つ「蒲原夜之雪」の記念碑がある。この絵は広重が天保三年（1832）四月に幕府の朝廷への献上使節の一行に加わった折りに描いたとされるが、広重

が上京した確たる証拠はなく疑問視されているとある。

この旅路 暴れ富士川 歴史知る

第18回 蒲原～興津間

蒲原から興津間は津波等の影響は少なかったのだろうか海沿いの街道である。

由比の宿は宿場の面影を残した古い家並が残り静かな街である。



由比宿本陣跡

そこに由比宿本陣跡があるが、その中に広重の作品約1400点を収蔵している東海道広重美術館がある。広重の絵がゴッホにも影響を与えたという比較絵もあり広重五十三次の東海道を歩く人には必見である。

向かい側に慶安事件の主犯の由比正雪の生家の正雪紺屋がある。品川の鈴ヶ森処刑場の丸橋忠弥との同時蜂起、この時代に成功の勝算があったのだろうか。



稲葉家：下り懸魚

宿場には高札場跡、御七里役所跡、問屋場跡、飛脚屋跡、軒先に船がい造り、下り懸魚のある特徴ある民家（稲葉家）がある。



その先の薩埵峠の手前に間の宿の西倉沢村がある。そこには名主小池邸、間の宿本陣跡（川島家）、藤屋望嶽亭がある。

勝海舟の親書を携えた山岡鉄舟は西郷隆盛との江戸無血開城交渉に赴く際、官軍に遭遇、望嶽亭の藤屋七郎兵衛に助けられ清水湊に脱出、清水次郎長に匿われたという。



この辺りは海岸線に切り立った薩埵山があり、上道・中道・下道の三種の道を付けて峠越えをしていた。峠からの景観は東海道随一で広重の絵にもなっ

ている。

薩埵峠を越えてきたところが興津川の河口で、興津川川越跡がある。この川は徒渡しであったが、水かさが減る冬場は仮橋が架けられ無賃で渡れた。

第19回 興津～府中間

この回は興津宿から江尻宿、府中宿を二日間で訪ねる。



興津川を渡るとすぐ興津宿になる。伝馬所跡、東本陣（市川家）跡、西本陣（手塚家）跡は標識が建っているだけだが脇本陣（水口屋）跡には「水口屋ギャラリー」がつくられ歴史を残している。

宿西端に巨鼈山清見寺^{きやうざん}がある。この寺には家康が今川の人質だった時に学んだ「家康手習いの間」がある。



西園寺公望公の晩年の旧居、坐漁荘も訪ねる価値あり。

江尻宿までは昔は松が200本あったらしいが今では細井の松原の掲示と松一本がある。江尻宿は家康が東海道五十三次を定めたときに現銀座通りを東海道としそこを江尻宿中心とした経緯在り。

五十三次 道改めし 江尻宿

扇屋脇本陣跡、府中屋脇本陣跡、羽根本陣跡、大竹屋脇本陣跡、寺尾本陣跡、橋本本陣跡があったが標石無。わずかに街づくり推進委員会の図で理解できた。町中に家康の命により架けられたという稚児橋あり。





上原子安地藏堂

家康と武田武将・穴山梅雪が会見したという上原子安地藏堂がある。

街道沿い左側に草薙神社大鳥居がある。ここから左約 1 km 奥に日本武尊を祀った草薙神社がある。この神社に奉納されていた天^{あめのむらくも}叢雲の劔が天武天皇の時代に現熱田神宮に移された。この劔が三種の神器の一つの草薙劔なのである。



草薙神社

他に八咫の鏡・八尺瓊曲玉^{はさかにのきがたま}を合わせて三種の神器という。



正覚山菩提樹院
由比正雪首塚

旧東海道から少し外れるが正覚山菩提樹院に由比正雪の首塚がある。

いよいよ府中宿（現在の静岡）に入る。駿河の国の国府がおかれた。

また、駿河の最大の宿場で幕府直轄とされ駿府町奉行が支配していた。

大御所家康公の駿府城の詳細はここでは割愛する。



華陽院

府中宿には家康公に関係ある華陽院（家康公の祖母の菩提寺）や静岡浅間神社（家康が十四歳の時に元服した神社）がある。

特に静岡浅間神社は極彩色の漆塗りの荘厳な社殿は家康の威光が感じられる。



静岡浅間神社 楼門



山岡・西郷会見の地
旅籠松崎屋跡

その他、街道沿いに山岡鉄舟・西郷隆盛会見の地（旅籠松崎屋源兵衛跡）がある。ここは、薩埵峠麓の望嶽亭で難を逃れた山岡鉄舟が勝海舟の手紙を西郷隆盛に手渡し江戸城無血開城の予備会談をした地である。この後で三田の薩摩藩蔵屋敷で勝海舟・西郷隆盛の会見で決着した話である。この地と望嶽亭、三田の会見跡と三か所の歴史的地点が繋がった。その他宿場関係では下伝馬本陣・脇本陣跡、上伝馬本陣・脇本陣跡、貫目改所跡、高札場跡、駿府町奉行所跡が石碑等で示されている。



宿場の西端は安倍川である。

広重画の府中はこの辺りを描いた絵である。

隠居後の 家康威光 今も尚

第20回 府中～藤枝宿

この回は二日かけて丸子宿・間の宿宇津ノ谷・岡部宿・藤枝宿を訪ねることに。

丸子宿には慶長元年（1596）創業の丁子屋（とろろ汁）がある。広重の五十三次の内にもこの丁子屋を描いている。



丁子屋

他に連歌師宗長ゆかりの吐月峰柴屋寺がある。

その他宿場町の東見附跡、脇本陣跡、本陣跡、問屋場跡、お七里役所跡、西見附跡の石碑あり。 約一里先間の宿宇津ノ谷に至る。



間の宿宇津ノ谷

宇津ノ谷は昔の景観を残した集落作りがなされ中腹に秀吉、家康と縁がある「お羽織屋」がある。

秀吉が切り開いたという宇津ノ谷峠は東海道の難所の一つだった。明治時代にトンネルでつないだが、さらに大正時代にも更にトンネルで繋いでいる。今は国道1号線のバイパストンネルが開通したため交通量は激減している。



宇津ノ谷峠

この区間 川と峠の 難所あり

宇津ノ谷峠を越えて谷間を抜けると岡部宿である。

この宿には天保七年（1836）再建された大旅籠柏屋がある。現存する江戸時代の大旅籠は珍しい。現在は整備して資料館として公開されている。



大旅籠柏屋

その隣に岡部宿本陣内野家跡が整備されている。

その他は問屋場跡、高札場跡の説明があるのみである。

街道沿いに五智如来像がある。

この五智如来像は、田中城城主の内藤豊前守の姫が口が不自由だったので誓願寺の本尊の阿弥陀如来に願をかけ完治した。感激した家老が寄進したものとされる。

岡部宿 印象深し 大旅籠

500M続いた岡部の松並木の先に岩村藩の飛び領地榜示杭（復元）あり。更にその先に田中領の榜示石がある。

田中藩領を約3km歩くと藤枝宿がある。藤枝宿の南東800mのところに田中城があった。田中城は家康が駿府城の西の守りとして譜代の家臣を城主としていた。その後幕府の

要職に就く大名が多く、出世城といわれた。

藤枝宿は田中城下の宿場町で交通の要衝であった。

街道がそのままだが経済成長期に道路拡幅、改築・新築が行われ古い家は全くなっ



ている。ただ、街道沿いのお寺新護寺・成田山（千葉の成田山の御分身を勧請）、熊谷山蓮生寺、円妙山大慶寺（日蓮上人お手植えと伝わる「久遠の松」）、大徳山正定寺（本願の松）が立派に残っており参拝の御



利益は十分ある。



宿場の問屋場跡付近の継飛脚風景を広重が藤枝の画として描いている。

宿場の外れに千貫堤が一部現存している。大井川の洪水を防ぐために田中城主水野堅物忠義は一千貫もの労銀を投じて造築したのでこの名がある。

第 21 回 藤枝宿～日坂宿間

この回は島田宿・金谷宿・日坂宿を二日間で訪ねる。

千貫堤から大井川手前の島田宿まで一里以上あった。いかに大井川が広範囲に氾濫していたかが想像できる。

島田宿は大井川の氾濫で流されたため寛永12年（1635）に宿を囲む輪中式堤防工事事で再建されている。島田宿には幕府の天領の駿河国志田郡・遠江国榛原郡を管理する代官所がおかれた。

島田宿の中央部に下本陣（置塩藤四郎家）その奥に代官陣屋跡あり、敷地内に御陣屋稲荷神社がある。この祠は代官が住民の安泰と五穀豊穰を祈るために建立したものである。他に中本陣（大久保新衛門家）、上本陣（村松九朗治家）があった。



大井川は「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」と言われていた。江戸防備の軍事的理由もあるが、当時の架橋技術が未熟で架橋できなかったし、渡船も禁止されていたので徒歩で渡るしかなかった。旅人の川越の手助けを職業とする人が現れた。

大井川側に川越遺跡として約十軒を復元しており、当時の街並みが垣間見える。



口取宿（人足定年45歳後も仕事を希望する人を詰めさせた）

荷縄屋（荷物を梱包したり、荷造り用具を売った）

仲間の宿（人足の代表が会合を開いた宿）

札場（川札をお金に換えた）

川会所（川越料金を決め川札を売った）

その他一般の宿には輦^{れん}台や駕籠の展示もある。

川^{かわ}傍^{そば}の島田市博物館に川越の詳細展示があり川越の様子がよくわかる。

少し下流になるが明治時代に架けられた全長約900M、幅2.4Mの木造の橋「蓬萊橋」は必見である。



川越の 待機で賑わう 島田宿

大井川を渡ったところが金谷宿である。ここにも金谷川越跡があったというのが復元解説図の掲示のみである。

金谷宿には江戸中期の大盗賊日本左衛門の首塚あり。

その他山田屋本陣跡、佐塚屋本陣跡、柏屋本陣跡、脇本陣跡、お七役所跡は立て看板でその存在を知ることが出来る。



金谷宿西はずれから金谷峠を上ることに。坂道は粘土質で雨天時難儀した

ことから村人に命じ石畳道となっていたが、近年コンクリート舗装されていた。平成3年金谷町民によって430M石畳道が復元されている。金谷坂はかなりの難所である。金谷坂上り切った所



に諏訪原城跡あり。天正3年（1575）長篠の戦で家康が占領、牧野城と改名している。

菊川に向かう下り坂菊川坂に700mの石畳道があるが、ここも平成3年に町民によって、発掘された江戸時代の石畳161Mを含めて700Mの石畳道が整備された。



菊川坂を下ったところが間の宿菊川である。前に大井川、金谷坂、菊川坂が更に後に小夜の中山があるため旅人が休める間の宿菊川が設けられた。

菊川の西端から中山峠に向けてまた急坂である。坂を上り詰めた所に久延寺がある。



その先は約3kmだらだらと下る坂が有名な「小夜の中山」である。静岡の茶畑を満喫しながら下ると昔「夜泣き石」があった



という場所がある。広重の五十三次図にも夜泣き石が描かれている。

更に急坂路（沓掛・二の曲り）が続きやっと下ったところが日坂宿である。

宿場は東西わずか700Mだが扇屋本陣跡、問屋場跡、高札場、旅籠は旅籠萬屋、大旅籠川坂屋を含め33件もあった。大井川の川止めや大名の参勤交代などで賑わった宿場であったようだ。

川越と 峠越えある 超難所

その先に坂上田村麻呂が興したといわれ、源頼義が京都の石清水八幡を勧請してことのまま事任八幡宮と名乗る。また、徳川幕府の保護を受けていた。

境内の天然記念物の大楠、大杉が目を引く。

第22回 日坂～見附間

この回は日坂から掛川宿、袋井宿、見附宿間を二日間で歩くコースである。

ことのまま事任八幡宮から約一里歩くと掛川宿である。

掛川宿は掛川城の城下町で城下町入口に防御構造の一つ七曲り道を設けている。

七曲り 掛川城の 備え有

宿場を示す面影はない。わずかに沢野本陣跡の標識があるのみ。他に浅羽屋本陣があったようだが標識もない。



掛川城詳細はここでは割愛する。

掛川宿から約一里先に五十三次の中間点である袋井宿がある。

袋井は 五十三次 ど真ん中

僅か570Mと小さな宿場である。町興しには熱心で東本陣跡、西本陣跡の公園が整備されている。

袋井宿から約1km位の所に家康の偵察隊と信玄の部隊が衝突した木原啜古戦場跡がある。三方ヶ原合戦の前哨戦となった所である。

大日堂古戦場跡は三方ヶ原の戦いが始まる前に家康の家臣本田平八郎が眼下の武田軍の動きを監視したところである。

遠州鈴ヶ森は罪人の晒し場と供養の場、日本左衛門もここで首を晒された。



約一里位進むと見附宿である。

見附とは京都から来るとこの辺りの大地から富士山が初めて見えたので「みつける」から「見附」と呼ばれるようになったのだという。

宣光寺に家康が寄進した梵鐘がある。この梵鐘に源家康とある。家康が源の姓にこだわっていたことがわかる。

宿内には平安時代から遠江国の総社だった淡海国玉神社、奈良時代に建立された遠江国分寺跡、天平時代に建立された府八幡宮本殿は徳川秀忠が寄進したもの等歴史を残すものが集中している。



見附宿から天竜川までは一里以上あるが広重は見附として天竜川の渡船の図を描いている。この辺りまで暴れ天竜の影響があったのだろう。

以上駿河・遠江路の道中概要を紹介しました。

次回は三河・尾張路を紹介します。

駿河・遠江路（三島～見附） 記 録

期間	2017/6～2018/1	延日数	13日
東海道五十三次	約128km	実歩行距離	約217km
歩行歩数	約30万歩	撮影写真枚数	1,824枚
纏めたPPT	496ページ	製本ページ	248ページ